

養護実習における学生の学びの検討 —実習記録簿の記述内容の分析から—

宮崎久美子 奥田紀久子 梶原京子
(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)

1. はじめに

徳島大学医学部保健学科看護学専攻では、養護教諭一種免許取得のための教育課程が認可され、平成20年度入学生から選択による養成が始まっている。養護実習はこの免許取得に必須となる科目であり、学内で学んだ学習内容を学校現場で実際に活用し、その過程と成果をアセスメントすることにより、養護教諭としての基礎的能力、応用能力を養うことを目的としている。

近年の社会環境や生活環境の急激な変化は子どもたちの心身の健康にも大きな影響を与えており、養護教諭は児童生徒の健康の保持増進に関わる専門職として大きな役割を担っている。養護教諭の資質の向上が求められている今日、実践的能力を育てていくためには効果的な養護実習を実施する必要がある。養護実習の学びの内容を明らかにし、実習事前指導・事後指導との整合性や連続性を確保することが効果的な実習につながると考えた。

2. 研究方法

平成24年度本学科看護学専攻4年に在籍する学生のうち、養護教諭一種免許取得科目を選択しており養護実習に参加した学生13名の実習記録簿を研究対象とした。

実習記録簿の日々の記録の「気づきと学び」「まとめと考察」に記述された内容を、「観察した」「参加した」「経験した」「思った」「感じた」「理解した」「学んだ」等の記述にそって抽出し、学習内容と記述数に焦点をあてて分析する。

実習期間は、平成24年6月4日～6月22日までの3週間であり、実習校は徳島市内の小学校12校、中学校1校である。

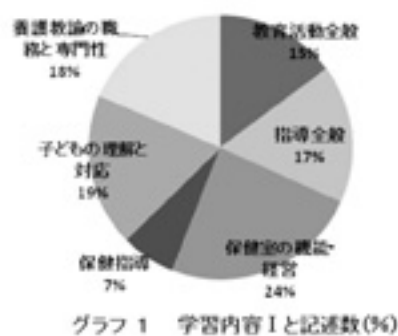
対象者のプライバシーに配慮し、実習記録簿は個人及び実習校が特定しないように、厳密な手続きを用いてデータを取り扱い、厳重に保管を行った。

3. 結果

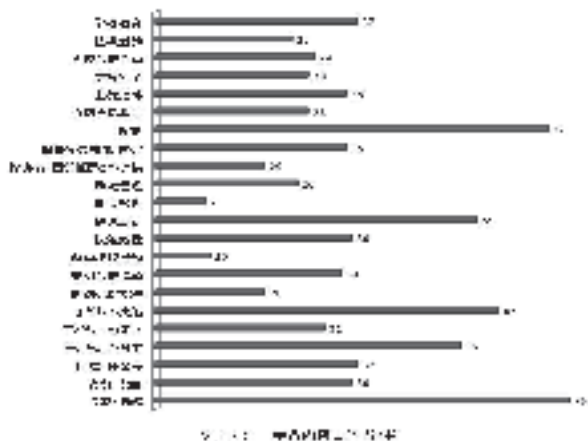
表 1 学習内容と記述数

学習内容Ⅰ(大項目)	記述数	学習内容Ⅱ(小項目)	記述数
教育活動全般	119	学校教育	37
		組織活動	25
		学校保健活動	29
		学校安全	28
指導全般	135	生徒指導	35
		特別支援教育	28
		授業	72
保健室の機能・経営	195	保健室の機能・経営	35
		保護者・関係機関との連携	20
		環境管理	26
		健康管理	9
		健康診断	59
		救急処置	36
保健指導	54	集団保健指導	34
		個別保健指導	20
子どもの理解と対応	150	子どもの実態	63
		子どもへの思い	31
		子どもとの対応	56
養護教諭の職務と専門性	149	自覚・使命感	37
		資質・態度	36
		役割・職務	76

本学では実習内容の目標として、学校教育活動の理解、学級(学級保健)活動の理解、子どもの理解と把握、養護教諭の職務の理解と経験、保健指導、専門性の確立と取り組みの理解、研修の7項目を掲げている。本研究では、抽出した記述総数は802件であり、小項目から大項目へとカテゴリー化した(表1)。ほぼ実習内容の目標は踏襲していたが、研究や課題の発見というような内容は分析対象の記録の部分からは見当たらなかった。



また、グラフ I でも示すように保健指導(集団・個別)の記述が少なかった。



細分化した学習内容Ⅱにおいて、健康管理（3名が記述）・健康相談活動（2名が記述）の記述数は少ないものの、他の項目については十分記述されていた。しかし、個別にみると（表2）学習内容のバランスや記述量に個人差があった。

4. 考察

学校教育活動全般については、実習期間の初期に実習校において管理職の講話や校務分掌長の講義等が組まれており、実習校の配慮がうかがえた。また、今回の実習では3週目に台風による休校措置が取られ、学生は学校安全、保護者との連携など多くのことを学んでいた。特別支援教育については、どの学校でも何らかの実習場が設定されていた。特別支援教育と養護教諭の職務との関連は多く、理解を深めておくことは必須であるため事後の指導において強化すべきだと考えられる。

また救急処置についてであるが、専門職としての期待度が大きいばかりでなく、昨今は養護教諭の対応に関して説明を求められることが多い。正しい知識・適切な判断のできる養護教諭を養成するという観点から、もう少し質的にも量的にも高いものを求めたいと考えている。臨床看護との違いを学べるような指針を事前指導に含めるようにしたい。

今回、養護教諭の職務で初めて知ったと記述している内容もあり、養成側としては記憶に残るような指導をしなければならないと思った。

また、筆者も少し前まで現職の養護教諭であったが、教育現場は刻々と変化していることが学生の記述から見えてくる。その変化にタイムリーに対応した指導をしていきたいと考える。

5. 結論

実習記録簿に記述された内容を詳細に分析することによって、事前指導・事後指導の改善点が明らかになった。また受け入れ校の配慮や養護教諭の工夫も見え、養成側と受け入れ側の連携をもっと深めることで、より内容の充実した実習になることが期待できるとわかった。

さらに学生は子どもへの思いや養護教諭の自覚・使命感等、その志向性を実習中に高めており、私たち教員は学生が自己の研究や課題と結び付けることができるよう指導していかなくてはならない。